

天理大学が学部第 25 回海外公演報告
第 60 回百済文化祭出演

佐藤浩司

9月26日から30日の期間、第25回海外親善訪問演奏旅行として韓国を訪問した。これは、第60回百済文化祭推進委員会の要請を受け、出演することになったものである。元々、第60回目となる百済文化祭は、9月26日から10月5日までの10日間開催されており、この全期間に出演の要請を受けていたが、雅楽部は、9月19日から秋学期が始まっているので、やむなく5日間の訪問となった。

雅楽部はこれまで、韓国には昭和50年の第1回海外公演以来、第6回、第12回、第14回、第17回、第20回、第21回と公演を行っており、今回で8回目となる。百済文化祭には、第50回、第54回、第56回と参加しており、今回で4回目である。第50回の際は伎楽での出演で、第54回、第56回は雅楽の出演であった。この度は、伎楽での出演である。

9月26日午後8時30分の便に乗り、10時15分金浦空港着、宿舎となる世宗市には、翌日の午前2時の到着である。世宗市は、忠清南道に、第二の都心として新たにできた市である。旅装を解き、就寝は3時過ぎとなった。百済文化祭は、公州市と扶余郡とが1年おきに交互に開催されていたが、7年前の平成20年(2008年)、第54回より公州、扶余の両会場で開催されるようになったものである。今回も、公州と扶余を会場に開かれ、私どもは、扶余で3回、公州で1回の公演を行った。



扶余・百済文化団地



扶余では、百済文化団地の舞台で、27日の午後5時1回、翌28日の午前10時1回、午後5時1回の計3回の公演を行った。百済文化団地は、2010年に訪問の折には、五重塔など、十幾つもの建物が建築中で、百済再現団地と呼んでいたものである。今は、見事に出来上がり、多くの観光客で賑わっていた。29日は、公州市の錦江新官公園にある錦江の河川敷を利用した特設舞台で行った。当初、午後3時半の予定であったが、降雨の関係で、午後5時の開始となった。

今回行った伎楽は、「行道」の部分と「獅子奮迅」の部分である。行道は、治道を先導として楽隊(庇持ち、笛、三ノ鼓、腰鼓、銅拍子、鉦盤)が登場、ついで獅子児に曳かれた獅子が



公州・錦江新官公園

現れ、獅子は舞台の傍らで寝てしまう。次に呉公が笛を吹き、呉女が呉女従を伴ってで、太孤父が太孤児に付き添われて出る。婆羅門は襴褌を洗う。崑崙、金剛力士とつづき、迦楼羅は蝮蛇を食む。最後に酔胡王が酔胡従を伴って出てくる。「獅子奮迅」では、呉女と呉女従が舞を舞っているところへ崑崙がやってきて、呉女に懸想する。これを金剛力士が見とがめ、崑崙を降伏する。ついで、酔胡王と従者の宴会が開かれる。酔っ払った酔胡従が、獅子に無理矢理酒を飲ます。酔った獅子は、大暴れ。これを呉公が静めようとする。まず、呉公の笛によって治めようとするが治まらない。宗教的権威の象徴でもある幡を取り出し、静めようとするが、これまた治まらない。そこで百花の王でもある牡丹の花を出すと、さしもの奮迅の獅子は治まってしまう。百済文化団地の公演はお天気もよく、多くの観客が三々五々集まってくれた。気の毒なのは29日の錦江新館公園特設舞台での公演、演奏の時に雨こそ上がったが、さすがに観客は少なかった。それでも、現地の舞踊関係者や国楽関係者が集まっており、盛んに拍手を送ってくれていた。

28日の午後、国立扶余博物館を見学した。目玉は、百済金銅大香炉である。百済の理想世界を、鳳凰と龍との間に、蓮弁の香炉がありその上蓋に僧侶と思しき人と楽人が模刻されている。おそらく百済楽と思われる5人の演奏者、筚篥(笙)や阮咸や箏篋や琴と、もう一つの打楽器のようなものが分かり難い。29日には、公州民俗劇博物館を見学した。ここは、沈雨晟先生の私的な博物館で、今は沈夏用さんが後を継いで運営している。先生は、人形劇コクトカクシの演者であり、韓国の民俗に関する造詣も深く、多くの著作をものしており、中には日本語の著書もある。現在、先生は、済州島に住んでおられるとのこと。ちなみに沈夏用さんは、「味摩之」というレストランを経営されており、私どもも素敵な料理をいただいた。また、雨天ではあるが、武寧王陵を見学した。武寧王陵は、宋山里古墳群にある7基の古墳の一つで、1971年に発見され、墓誌から百済における25代の王であることが判明した。未盗掘であったので4,600個と遺物も多く、実に17個が国宝に指定されている。30日、帰国前に、国立国楽院を訪問した。残念ながら演奏は聞けなかったが、国楽博物館で、国楽に関する多くの楽器の見学ができた。

駆け足の短い滞在ではあったが、学生にとって実りあるものとなった。これはひとえに、貴重な面と装束をお貸しいただいた薬師寺様のお陰である。記して御礼を申し上げたい。